

神と人

(創世記3・1〜21)

一、いつ、だれによって

聖書の舞台となった地域は、多神教の世界でした。しかし、アブラハムを祖先とする古代イスラエルは、徹底した一神教でした。一神教が徹底するとうなるのでしょうか。それは、良いことだけでない、悪いこともおひとりなる神から来るという信仰になります。

ですが、創世記3章を見ますと、一神教の割には、悪魔の化身のようにも思われる「蛇」が出てまいります。なぜ、蛇が登場するのでしょうか。蛇が狡猾であり、人を惑わすのもってこいの動物だったからです。もし一神教を徹底するならば、女を試みる者も神でなければなりません。しかし後の時代に、ヤコブ書がいみじくも語っています。〈だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、自分でだれを誘惑なさることもありません〉と。そこで著者は、女を惑わす配役として、「蛇」をこれに充てました。そのキヤスティングはぴったりでした。では、著者はどのような動機から、創世記を書いたのでしょうか。著者は主なる神を信じるイスラエル人でした。可能性としては紀元前6世紀の終わり

から5世紀にかけての方です。その時代、南王国ユダの住民がバビロンに捕虜として連れて行かれ、さらに時代はバビロニアの支配からペルシヤの支配へと移り、ペルシヤの王クロス2世が出した勅令(↓エズラ1・2〜4)により、イスラエルの民の内、志を授かった者たちは期待と不安の中で祖国の再建を目指しました。同じ頃に記されたと考えられますヨブ記には、ヨブが「私がアダムのように、自分のそむきの罪をおおい隠し、自分の咎を胸の中に秘めたことがあるか」と語っています(↓ヨブ31・33)。そして、ヨブ記を二百年以上さかのぼりますが、預言者ホセアの書にアダムの話が登場します。「ところが、彼らは(↑エフライム↑北王国イスラエル)アダムのように契約を破り、その時わたしを裏切った」とホセアが語っています(↓ホセア6・7)。はっきりしているのは、聖書において、アダムの物語は古代イスラエル王国の黄金期と言われた、ダビデ王、ソロモン王の時代の文書には現れないことです。

二、聖句に耳を傾ける

3章1節を見てまいります。〈さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」とあり

ます。蛇は人を惑わす者(↓黙示録12・9)ですが、私たちには具体的にどのような形で現れるのでしょうか。ヤコブ書1章14節に、次のようにあります。〈人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです〉と。

蛇が女に語った時、物語の設定では、女は純真でした。しかし、欲はありました。欲と言うより、向上心と言ったほうが適切かもしれません。そういう純真さを、蛇は狙っていました。そして、女の内面にある思いや知識を引き出すような言葉を語りました。それが、1節後半です。〈あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。〉と。女は夫(アダム)から、神が語られた言葉を聞いていました。だから、「そんなことはありません」と語ろうとして、蛇に言いました。2節、3節です。〈女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の實について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。〉と。女の知識はあやふやでした。女があやふやな答えをしたのを、蛇は見逃しませんでした。蛇は語りました。4節、5節です。〈そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が

開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。〉と。ちなみに、ヘブライ語の善悪「ヤードー」は道徳的なものに限られてはいない、とのこと。むしろ「すべて」という意味があるようです。また、「知る」は単に知的なことを知るだけではありません。経験するということがあります。ということは、善悪を知るとは、すべてを知り、すべてを自分で判断し、決めて生きていくことです。これは、神の領域です。そのような、神の領域に踏み込むことが善悪を知るとい意味になります。

女は一人になり、時間が経過します。そうしますと、園の中央にある善悪の知識の木はとも魅力的に見えてきました。6節です。〈そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いつしよにいた夫にも与えたので、夫も食べた〉とあります。その結果二人は、主なる神との関係においてゆがんでしまいました。こういう姿が「罪」なのです。そして、罪の問題を解決できるお方は、神が遣わされた御子であり、救い主であるイエス・キリストだけです。なぜなら、罪のない御子イエスが私たちの罪のために十字架で死なれ、葬られ、三日目に神によって復活させられたからです。